

よみがえれ！
有明訴訟弁護団
(後藤富和)発行
092-512-1636
090-9602-0700

もう待てない 諫干海上デモ

1300人 女性部も

【佐賀・9月10日】諫早湾干拓事業の潮受け堤防排水門の開門調査実施を求める佐賀、福岡、熊本、長崎4県の漁業者が10日、漁船約300隻で堤防前の海上から早期開門を訴えた。開門調査実施の判断が先送りされる中、赤潮やタイラギ大量死などの環境悪化に苦しむ漁業者たちが「もう待てない」と切実な声を上げた。



北部排水門前に集結した1300人の漁民

漁船は隊列を組み、巨大なブルーシートに「被害知れ」「即時開門」の文字を掲げて早期開門を要求。佐賀県有明海漁協の草場淳吉副組合長が「開門調査の実施で初めて有明海再生の扉は開かれる」として山田正彦農相への要請文を読み上げ、「われわれの宝の海を返せ」とシユプレヒコールを上げた。太良町の上戸良太さん(35)は「判断先延ばしの中で、タイラギが大量死した。有明海が参院選や大臣交代など政治に翻弄(ほんろう)されている」と批判。「民主党の代表選で大臣が変わってしまえばまた一からやり直しになるの

では」と不安を募らせた。北部排水門近くの広場には鹿島市や太良町の漁協女性部や市民団体のメンバーら約250人が集まった。女性部の抗議行動参加は初めてで「我々はもう待てないぞ」と書いた横断幕を掲げて氣勢を上げた。川崎組合長と2漁連の会長らが熊本市の九州農政局に要請文を提出した。

漁民要請文 「開門調査早期実施を」

【要請文・9月10日】有明海では梅雨明け近い7月前半からタイラギ斃死が確認されるようになり、貧酸素水塊の発生が目立つ7月中旬には100%の斃死が報告される事態となった。

昨年度のタイラギが13年ぶりの豊漁となり、今後数年は、残るタイラギの漁獲によって生活ができると思われていた矢先だけに、潜水器漁業者の落胆は計り知れない。

また、赤潮の多発、早期化はノリ養殖の当面する大きな弊害として、漁家経営を大きく疲弊させており、ここ2年は年末の局的かつ恒常的な色落ちの発生によって、後継者を抱える漁家が再起不能な状況に陥ろうとしている現状に、私たち漁業者は憤懣(ふんまん)やるかたない思いがある。

干拓調整池の排水や堤防締め切りによる海況の変化が、赤潮発生や貝類斃死の原因となつていくと、いったん疑念は日毎に増しこそすれ、無くなつていくものではない。

今年4月、当時の赤松農水大臣は、与党検討委員会の開門調査実施を示した報告を受け、開門調査を公式に表明すると私たちの前で明言した。我々漁業者は、やっと再生の光明を見た思いで安堵していたが、山田農林水産大臣が就任後、その発言は前大臣が説明した内容には程遠く、財源不足を理由に開門調査の判断を先延ばししようとしている。

国が結論先延ばししこれまでとまったく変わらない姿勢では、沿岸4県住民並びに漁業者は、再び不毛に帰する混乱に陥り、お互いの対立の中で非難を繰り返すことになる。

有明海再生のためにどうしても排水門は開かれなければならない。開門調査の実施によって、初めて有明海再生の扉は開かれるものと、多くの漁業者が信じて一刻も早い国の英断を待ち望んでいる。

国は、諫早湾干拓調整池の開門調査が有明海沿岸漁業者の生活権がかかった最大の懸案事項であることを理解し、前大臣の発言に責任を持ち、開門調査の実施について早急に公式表明すべきである。

開門調査を実施せよ！
我々の宝の海を返せ！